

花屋の軒先に飾られた、鮮やかな黄色に目を奪われて青木篤は足を止めた。小振りの黄色い花が、細くしな
る枝の上に群れ咲いている。花の名前を思い出せず、首を傾げると同時に軽い衝撃があった。

脇腹にぶつかってきたのは小学生ぐらいの子供だった。篤の胸より下ほどの背しかない。視線が合うと、子供
は謝るように小さく顔を俯けた。走り去っていく幼い後ろ姿に、直己が自分と一緒に暮らしたはじめたのも、あれ
ぐらいの歳だったな……と思ひ出した。

花の名前が出てこないことにどこか引つかりを感じながら、今にも雨が降りだしそうな雲に急かされるよう
に足早に歩いた。

呼び出されたのは、アンティークな人形が飾られたカフェだった。母親は昔からこういつたヴィクトリアン調
の古い家具や人形が大好きだった。アンティークな人形は家にもいくつかあるが、篤は幼い頃からどうしてもそ
れらを好きになれなかった。人に似すぎた青色の瞳や磁器の肌を持つ人形は、夜中になると勝手に歩き出しそ
うで怖かった。

店に入ってきた息子に気がつくのと、奥のテーブルにいた母親は嬉しそうに右手を上げた。向かい合わせに腰掛
ける。顔を合わせるのは、二ヶ月振りだった。

「お久しぶりです。おかわりないですか」

母親はブラウスの丸襟を指先で押さえて、ニコリと笑った。可愛らしいものが大好で、今でも歳のわりにフリ
ルやギャザーを多く使った服を着る。それが厭味に見えないのは、幾つになっても母親にどこか少女のような趣
があるせいだ。

「実はね、先月からアートフラワーの教室に通ってるの。月曜日はお料理教室で、火曜日と金曜日はお茶でしよ

う。予定が沢山で忙しいのよ。あなたの方はどうなの、お仕事は大変なのかしら？」
「年度末は忙しかったですよ。けど四月に入ってから落ち着いて、いつも通りかな」
軽く息子を睨みつけると、母親は小さく肩を竦めた。

「私から連絡をしないと、あなたからは電話もかけてこないものね」
自覚があるだけに弁解もできず、篤は素直に謝った。

「すみません……」

母親はフツとため息をついた。

「男の子は素っ気ないから、育ててもつまらないわ。……それはそうと、今日呼び出したのはほかでもない、あ
なたに渡したいものがあつたからなの」

隣の椅子の紙袋を手にとると、篤に向かつて差し出した。袋の中には色紙よりも一回り大きいサイズの厚い紙。
取り出さなくても、何なのか察しがついた。

「……見合い写真ですか」

「……見合い写真は微笑んだ。」

「そうよ。あなたももう三十三歳でしょう。そろそろ結婚のことを真面目に考えてもいい頃だと思うの。あの子
も大学に合格したことだし、家を出るなら何の問題もないでしょう。それなら少しでも早い方がいいと思って」
「……直己は県外の大学も受かっていただけ、最終的には地元国立大に進学を決めたんです。県外は私立だつ
たし、少しでもお金がかからないようにと考えたみたいで。地元の大学だと今住んでるアパートから電車で五分

もかからないから、そのまま通うつもりらしくて……」

「あの子、大学に進学したらアパートを出るって言ってたじゃないのっ」
和やかだった母親の形相が一変した。

「県外の大学に合格すれば家を出るだろうと僕が勝手に思っていただけで、本人の口からはつきりそうと聞いたわけじゃなかったんです。直己の遺産も残り少なくて、大学を卒業するまでもつかどうかかわからない。僕としても一緒にいてもらった方が、あの子のお金の心配をしなくていいから気が楽なんです」

「どうしてそこまで面倒を見なくちゃいけないの」

母親は軽く唇を噛んだ。

「もう十八でしょう。残りの遺産を渡して、好きにさせればいいじゃない。あなたが面倒を見る必要はどこにもないのよ。あの子、人にどれだけ迷惑をかければ気がすむのかしら」

「直己はまだ未成年ですよ。僕も彼が二十歳になったら自分で遺産を管理してもらおうと考えてますけど……」
母親は額に手をあて、呟いた。

「どうしてあの子だけ生き残ったのかしら。一緒に逝けばよかったのに」

背筋が凍るような恐ろしい言葉を残して、母親は帰っていった。双子の弟の隆たかが死んで八年経つが、母親は未だに伊沢邦彦くにひこを許せなかったし、その甥である黒田直己も受け入れることができなかった。母親は隆を溺愛していたから、無理もない。篤は冷めたコーヒーを飲み干し、ため息をついて立ち上がった。

置いていかれた見合い写真を手に、家路につく。母親は篤が直己と共に住むようになってから、アパートに来たことはない。用があれば携帯電話に直接かけてきて、外の喫茶店に呼び出した。直己の姿を見たくないし、た

とえ電話越しでも声を聞きたくないという態度は、八年間徹底している。

地下鉄の駅に辿り着く前にととうと雨が降りはじめ、傘を持っていなかった篤はデパートの中に走り込んだ。駅へと続く地下通路を歩いていると、地下街のショッピングモールの窓硝子、フレッシュシャツと書かれたオブジェの横に男女のスーツが揃って飾られているのが目に入った。そういえば大学の入学式、自分は何を着ていっただろう。古い記憶を手繰り寄せる。スーツだったような気がする。それなら直己にも用意した方がいいだろうか。

適当に見繕って買ってもいいが、一度は試着させたかった。直己は高校に入ってから背が伸びて、今は一九〇センチ近くある。一七〇センチの自分は直己が高校一年の時にあっさりと抜かれてしまった。直己の叔父である伊沢も長身だったから、背の高さは遺伝なのかもしれない。

硝子越しに服を見ていると、中の店員と目が合った。ニコリと笑いかけられ、篤は軽く会釈すると、慌てて店の前を通り過ぎた。買っても服が合わなかったら最悪で、けれど服を買ってやるから一緒に買い物に行こうと言っても、嬉しがついてくるような子じゃない。服を買えと金を渡しても、それが篤の金だとわかったら決して受け取らないだろう。そういうところは恐ろしく律儀だった。

駅の改札を抜け、人もまばらな日曜日の電車に乗り込む。軽く揺られながら居眠りし、振動にふと目を覚ますとトンネルの中。向かいの硝子にはくたびれた男の顔が映っている。誰だろうと思ったら自分で、思わず苦笑いした。

二十歳を超したら一年が早いと誰が言ったのだろう。直己と暮らすようになった二十五歳からの八年は、あつという間だった。多少なり問題はあったとしても、何とかここまでやってきた。一人でいること、結婚をしない

理由が『直己』のことだけではなく、未だに未練がましく死んだ男を想っているからだと知ったら、母親はなんと言うだろう。自分を罵倒するだろうか。

膝に置いた見合い写真がやけに重たく感じられる。ついこの間まで彼以外の人を、女性を愛することなど考えられなかった。直己も大学に進学して独り立ちしそうなった今、ようやく結婚して子供でもつくり、親を安心させてやるうかと思うようになった。

伊沢を好きだという気持ちがなくなつたわけではない。誰かを、彼のように愛するのは到底無理だとしても、優しくすることはできそうな気がした。共に暮らすことも、きっと可能だろう。今だって他人と暮らしているのだから。

アパートの近くの駅で電車を降り、ホームで直己に似た後ろ姿を見つけて驚いた。振り返るまでに人違いだと気づく。直己は今年の春に高校を卒業した。制服を着て電車を待っているはずはなかった。

引き取った頃、直己は同い年の子供と比べると一回りも二回りも小さく、痩せていた。ちゃんと成長するのだろうか心配だったが、篤の心配をよそに、高校入学と同時にどんどん背が伸びはじめた。見ていて気持ちがいいほどに。けれどどんなに成長して、少年から青年の顔になるうとも、直己には叔父である伊沢の面影は微塵もなかった。

伊沢は明るい性格でよく喋る男だった。大雑把なようであるが、内面を表すように顔つきも優しくかった。直己は篤が引き取った小学生の頃から、無口な子供だった。それは今も変わることなく、必要なこと以外は喋らなかつたし、話しかけてもこない。いつもどこか腹を立てたような仏頂面で、笑わない。切れ長の鋭い眼差し、薄い唇に『濃厚』という雰囲気はなかつた。

一緒に暮らしていても、おはようとか、いただきますとか、ごちそうさまとか……決まりきつた挨拶しか交わさない。高校生になってからは必要なものは自分の小遣いかバイトした金で買うようになり、大学へ進学する時さえ篤の助けを必要とはしなかつた。唯一聞いてきたのは、自分の遺産があとどれだけ残っているのか、ということだった。

「お金の心配なんかしなくていいから、自分の行きたい大学に行きなさい」

子供の可能性は何物にも変えられないと思つていたから、篤は直己に金銭的な理由で自分の希望を曲げてほしくなかつた。けれど直己は篤が思うよりも現実的だった。

「俺があんたに聞いているのは、遺産が幾ら残っているかだ」

硬い口調には、篤の氣遣いを疎ましがる響きがあつた。立場をわきまえ、自分のできる範囲で納得できる結論を出す。そういう子供だった。

直己が高校三年になった春に、担任教師との個人面談があつた。教師は直己をとてもしつかりしている子だと言つた。自分の考えというものを持つているし、目標もある。思つたことははっきりと言える。成績も上の方だし、超難関と言われる大学を目指すのでなければ、どの大学を選んで問題はないだろうと言われた。

「直己君は将来弁護士になりたいと言つていました。無理だろうけど、できる限り努力はしてみると。いや、驕りのない、いい子ですよ」